英国から学ぶ日本の英語教育！

―英国の小学生はどのようにして英語を学校で習得しているか―

英語英文学専攻 博士前期課程1年　大平紅童

私は、2005年8月4日～14日にかけて英国国際教育研究所のプログラムでロンドンに行き、そこで子どもたち、特に7～11歳までの児童が学校の教科を通じてどのように英語を習得していくのかを観察する機会を持つことができた。英国国際教育研究所とは、日本語学、言語学、日本語教育、言語教育を研究対象とする「日本語教育協議会（The Council of Japanese Language Teaching=CJLT）」および日英の教育制度や教育問題さらに文化研究をその主たる研究対象とする「日英の教育と文化に関する研究協議会（The Council of Anglo-Japanese Education and Culture=CAJEC）」といった両学会の本部として、総会ならびに研究発表大会の開催等の活動を行っている機関である。英国の児童英語教育を考えるにあたり断っておかなければならないことは、英国はいくつもの国からたくさんのバックグラウンドを抱えた人々が交じり合っている多民族国家であるということだ。アフリカ系、ラテン系やアジア系などバラエティー豊かである。中でも特にインド人が多く、これは英国が植民地支配していたことと深く関わっており、現在トップランクの大企業経営者、政治家、学者から労働者まで幅広く活躍している。小学校の教室においても様々な人種の子どもたちが入り混じっており、子どもの時から国際化ということに意識が向きやすいのではないだろうか。それに比べると日本の場合、2000年9月の文部科学省調査によると、外国人児童・生徒の総数は18,430人で、公立学校の在籍者の中に占める割合は0.13%と発表されており、異文化を持った児童に接する機会が少ないと考えられる。ところで、英国では上述したようなクラスの中、子どもたちはどのようにして英語を習得していくのかということに注目したい。加えて私は学部生の時、中国語学科に所属しており、卒業論文として「日本・上海の中学校英語教育比較」というテーマを取り上げたことがある。英語教育を考える上で、このように他国のやり方と比較しながら考えることは有意義な機会であると思う。

2005年8月12日 Millenium School にて

はじめに学校のシステムの違いを簡単に説明する。日本の場合、おおむね子どもを通学区域の公立小学校に通わせ、そこで教師が国から認定された教科書を用いて授業を行う。また、各学校で実施されるテストは独自に作成され、公に発表されることはない。一方英国では、ナショナルカリキュラム（1988年の教育改革法によって作られた、いわゆる英国の学習指導要領にあたる法的資料に規定された教育を行う教育課程）に基づき試験が行われる。それにより6～7歳の時、英国全体で統一テスト（英語と算数）が行われる。次に10～11歳と13～14歳の時、再び統一テストが行われる。そしてこの成績の結果が進学に極めて大きな影響を与える。更に、子どもたちの成績は学校全体で算出され英国の全公立学校を含め順位が新聞などで発表される。また、英国では就学にあたり、校区制が無いので選択肢が広い。しかし、公立小学校では学力による選考は認められていないので、希望者が定員より多くなってしまった場合、地方教育局（LEAとよび、日本の教育委員会にあたる）が、兄弟姉妹の通学の有無や学校からの距離が近いなどの要因を選考基準として決定する。

次に、本題である英語教育について言及していく。もちろん、英国での児童に対する英語教育（日本で言う“国語”は、英国では“English”ではなく“Literacy”と呼ばれる）と我々が受ける英語教育に違いがあるというこというまでもない。しかし、言語を習得するという過程において、英国の児童が英語を学んでいくプロセスから日本の小学校英語教育に対し、何かヒントとなることがあるのではないだろうかと私は考えている。

日本と英国においての教育の違いは、大きく分けて2つあるように思われる。1つ目の相違点は、日本では文部科学省が認定した教科書を使用することが義務付けられているが、一方の英国では教育技能省（Department for Education and skills）を頂点とした教育機関はあるが、日本のように認定教科書はなく教師自身でそれぞれどの教科書を使用するのか選択することができる。これにはメリット・デメリットがある。メリットは、各児童のことを熟知した担任の先生が教材を選択することにより、児童の更なる興味や理解を深めることに繋げることができるということである。デメリットは、学校間または教師間の中で差が出てきてしまう恐れがあることだ。英国で統一テストの成績が発表されるのは、このような背景からであると考えられる。2つ目の相違点として、児童が発する言葉に対する教師の修正の方法が挙げられる。日本で、生徒が英語を発する時教師が重点的に注目するところは、文法的間違いや発音に対する間違いだろう。英国では、伝達行為の中で理解不能となった場面に焦点が当てられる。すなわち教師は文法的なことではなく内容（content）について細心の注意を払い、そこで起きた間違いを修正する。このことは既に日本でも奨励され始めている点である。いわゆる内容重視の英語教授法である。これはコミュニケーション重視の風潮が強い、日本の社会の要求に適ったものであると言えよう。しかしここで確認しておきたいことは、このことが文法を軽視した考え方ではないということである。我々が英語を使うとき、でたらめな文法では通用しない。しかしアウトプットを通し、また人とのコミュニケーションを通し文法などを習得していくのは一つの手段である。これは、今私が大学院で研究している「第二言語習得」に関連するところなので詳しく説明する。第二言語習得論者のSwain（1985）がアウトプット仮説（Output Hypothesis）を提唱し、アウトプットの重要性が注目され始めた。アウトプット仮説では、言語を習得する過程で理解可能なインプット（comprehensible input）を聞くこと読むことは不可欠であるが、それだけでは不十分でありアウトプットすることも不可欠であると主張されている。私が興味を持っているのは、アウトプットの「気づきの機能」である。アウ

トプットすることにより、学習者は現在の能力では言えないことに気づく。ここで対話者からの理解可能なインプットや、双方で意味交渉することにより、学習者はその語形を取り入れ習得していくのだ。ここからもわかる通り、学習者がアウトプットする際に大事なことは、完璧な英語を話すことではなく、自分の伝えたい内容を相手に伝えようとする姿勢である。本来、会話は双方で構築していくものであるから、誤った英語をアウトプットしてしまっても、そこで相手と意味交渉し相互理解すればよい。私は、この過程が言語の習得に繋がっているのだろうと考えている。

最後に私が英国国際教育研究所のセミナーで学び、経験したことを記したい。多くのことを学んだ中、一番印象深かったのは教師のあり方に関する事であった。私は「Children Learning English」の著者として世界的に権威のある理論家で、児童英語教育における第一人者であるMoon先生とWilliam Tyndale Primary School現役教員ROwe先生から学んでいたのだが、教師というものは児童に対し良い聞き手であり、また児童から話を引き出すプロフェッショナルでなければならないということを徹底的に教え込まれた。英国の先生の特徴として、生徒に自分で考えさせ、それをクラスメートの前で発言させる、そして必ずどこか褒めてやるということが言えるのではないかと感じた。この部分で日本の教師とは質が違うのではないだろうか。ROwe先生のルールとして、毎回講義の終わりに一人3つの質問をすることが約束されていたのだが、私はその質問を考えるのにいつも四苦八苦させられていた。これは、今まで私が常に受身の姿勢で講義を聴講していたということと関連がある。また、子どもの時からあまり自分で考えることをしてこなかったということに原因があるのではないだろうか。一方英国の子どもたちは教師から自分で考えることを求められる。つまりそこで考える力が身につくのだろう。これは英語に限らず、どの教科においても学習する時に必ず必要となることだと考えられる。現在、日本ではますます英語が必要不可欠なものと成りつつある。そのため、英語は受験必須科目となっており、中学生・高校生は必死になって勉強している。しかし、本来英語は異文化の人々とコミュニケートする手段として使用され、英語教育の目的は、国際社会において広い視野を身につけさせることだと思う。このことを、ロンドンにあるMillennium Primary School訪問し実際に様々な人種の子どもたちが交じり合い、何の疑問もなく一緒に学び遊んでいる姿を見た時に改めて痛感させられた。今、私は横浜市立齋藤分小学校で英語アシスタントとして月に2～3回、4～6年生の子どもたちに英語を指導させて頂いている。そこでは第一に、子どもたちに楽しんでもらう事を考え、そして英語を使って相手とコミュニケーションが取れる喜びを感じてもらえればと考えている。今回のイギリス訪問で考えた事、それは“英語教育本来の目的”をいつも明確に胸に抱いておかなければいけないという事だった。

私は英語教員になることを目指している。私が指導者の立場になった時、生徒に伝えたいことは、英語を使って異文化の人とコミュニケートできる喜びである。私が以前カナダに1年留学していた時、それまで英語で人とコミュニケーションをとることはほとんどなかったが、そこでブラジル、メキシコ、中国、韓国など様々な国の人たちと友達となり、英語でコミュニケーションを取れることがとても楽しくて嬉しかった。その体験を下に、私は生徒たちの持つ可能性の芽をじっくり見守っていけるような教師になりたい。

神大の留学生に聞く ―中国上海

外国語学部 英語英文学科3年 竹田真理子

羅 嫣（ラ・エン）さんは中国の上海出身だ。高校卒業後日本へ留学し、語学学校で日本語を、帝京大学短期大学でコミュニケーション学を勉強したのち、今年から神奈川大学の3年次に編入した。現在は外国語学部の英語英文学科に在籍して、英語を学んでいる。日本人の私たちと同じように授業をこなす一方で、ファッション雑誌の記者からスナップ写真を頼まれることも多いという。

今年は戦後60周年を迎え、教科書問題も度々話題となる。私は羅さんの友人として、彼女がその事について十分に知識があり、自分の意見を持っている事を知っている。しかし私はあえてそういった話を避けて、羅さんにインタビューした。それは私が、歴史に関する話題よりも彼女の素晴らしい個性や魅力を記事にしたいと感じた為である。

―留学を決意したのはどうしてですか？

日本のファッションが大好きだったからです。中学の頃から、雑誌、テレビ、ビデオなどを見て、日本のファッションにあこがれていました。服・メイク・ヘアスタイルが中国とは違っていて、とてもかっこよく見えました。中国では小学校・中学校・高校では学校に行く時、長い髪だとアップでまとめなければいけないんです。中国人は髪をアップにする事を好むけれど、私はおろしている髪の方が女性らしくて好きです。

最近では、中国人と日本人の着る服は似てきていると思います。この前上海に帰った時に、私が日本で購入した服と同じ服を見つけたんですけど、上海のお店の方が安く売っていてショックでした。中国と日本では、販売している服は似ていても、着こなし方が異なっていると思います。中国では、キャミソールやチューブトップ1枚だけでは外を歩けません。昔の日本のように、露出度の高すぎる服装はタブーなんです。ですから帰省する時には、肩の隠れる服を選んで持っていくんです。

それから、メイクも中国と日本では違うと思います。具体的に言うと、日本ではみんなアイメイクをしっかりとして、マスカラやアイライナーなどを使っていますよね。中国ではアイライナーやファンデーションを使うのは日本ほどポピュラーではないと思います。日本と比べてメイクが薄いんです。

中国にいた頃は、日本のドラマのビデオを借りたり買ったりして見ていました。『GTO』、『魔女の条件』、『神様もう一度だけ』、『ビーチボーイ』、『星の金貨』などです。もっと沢山見たんですけど、名前が思い出せないです。日本のファッションはかっこいいな、と思いながらドラマを見ていました。

留学に対して両親は反対しました。特にお父さんは共産党の人だったので留学には大反対でしたけど、無理矢理押し切るような形で留学しました。でも、今では私の頑張りを認めてくれて、両親は私を応援してくれています。

―羅さんの発表した詩を聞いて、先生が感動のあまり涙した事を覚えていますか？自作詩の発表が必ずある、英文学演習の授業中の事です。

自作詩には、両親に対する感謝の気持ちと、お父さんにパスポートを隠されてしまったエピソードを書きました。初めて私が日本から帰国した時、お父さんが私をもうどこにも行かせたくないと言ってパスポートを隠したんです。その後もお父さんはどうしても返してくれなくて、言い争ったりもしました。日本行きの飛行機を予約していた日になって、お母さんがお父さんの隠していたパスポートを渡してくれました。日本語で書いた詩で、先生を感動させる事が出来て嬉しいです。

日本では、中国にいる両親や友達と会えなくて寂しいと感じる時もあるけれど、中国（上海）と比べて日本はとてもキレイで住みやすいと思います。接客態度や人々のマナーも日本の方がしっかりしていますし。横浜に住む事にしたのは私のおじさんとおばさんが横浜にいたからですけど、横浜は上海と似ている部分がたくさんあると思います。ベイブリッジがあったり、港があったり…山下公園から見る海の眺めは、特に上海と似ていると思いますよ。

―留学して、良かった事は何ですか？

性格が変わった事です。中国にいた頃はどんなに心の中で思っていても口に出せなくて、言いたい事が言えませんでした。でも日本にきてから自己主張ができるようになって、明るくなりました。それはきっと…日本に来たばかりの頃は何も分からない状態だったので、人に聞かなければいけなかったからでしょうか。例えば、電車の乗り方が分からなくて戸惑った時などです。その頃は中華街の近くに住んでいて、横浜駅付近にある学校に通っていましたが、京浜東北線の大船行きと大宮行きのどちらに乗れば家へ帰れるのか分からなかったんです。乗り間違えたのに気づいて、すぐに電車を降りて戻った事もありました。色々な路線があるからとてもややこしくて、駅構内のどこを見れば知りたい情報が載っているのかさえ分からない状態でした。手帳に自分の最寄り駅を書いていたので、たどたどしい日本語で人に尋ねたことを覚えています。そうやって人に尋ねるにつれて勇気が出て、自分の意見を言うのが恥ずかしくなくなりました。

―では、嫌な事は？

家族や友達が恋しくなる事と…中国人だからって馬鹿にされた事です！電車に乗っている時に中国語で話をしていたら、目の前の女子高生達が「中国人だ」とか「中国人がヴィトン持ってる」と馬鹿にした口調で言うので、とっても頭にきて喧嘩しました。相手に向かって日本語で「ふざけるな」って言ったんです。相手の女の子達は何も言わないで、電車を降りて逃げていきました。そんな事が何回かあってすごく嫌でした。

そういえば、日本人の女の子は自分がカワイイと思っていなくても「カワイイ」ってよく言いますよね？自分がカワイイと思わなければ、カワイイって言って欲しくないです。本音と建前は、嘘みたいで嫌いです。でも日本人の女の子は（中国人の女の子と比べて）優しいと思うんです、それはいい所だと思います。

―羅さんは日本語がとても流暢ですよね。日本語をマスターするにあたって、また憧れの日本人のファッションに近づくために、どんな努力をしてきましたか？

毎日分からない単語をメモして、移動時間などにメモを何度も何度も読み返しました。そして、日本人とたくさん話すように心がけました。どんなに日本語が下手でも、極力日本語で会話をするようにしていました。それから、日本語の文法の本を読んだり、雑誌、本、テレビなどを見て勉強しました。雑誌は、『egg』が好きで、テレビでは『さんまのからくりテレビ』や『ちびまるこちゃん』が面白くて好きです。『ちびまるこちゃん』は中国にいた頃から見ていました。まるちゃんが可愛くて好きです。

今でも分からない単語はあるけど、こうして大学にも合格できたので嬉しいです。次の目標は、日本で就職する事です。貿易関係の仕事に就きたいと考えています。仕事で日本と上海を行き来できるようになるのが理想です。でも、ただお茶くみやコピーとりだけをしているだけのOLには、なりたくありません。

日本人のファッションに近づくために、雑誌を見てメイクを何度も練習しました。日本のファッションは、ギャル系、Bギャル系、お姉系、原宿系…このくらいに分けられると思うんですけど、私はギャル系が好きです。ギャル系はとてもセクシーだと思います。そういえば私は『アルバ』の服が

とっても大好きだったんですけど、今はもうアルバは全てのお店が無くなってしまったんです。それを知った時は本当にショックでした。よく買い物に行くのは109です。仲のいい店員さんのいるお店には必ず顔を出します。

私はクラブで踊るのが大好きなんです。ダンスは中国にいた時から好きでした。学校の授業の中で、安室奈美恵さんの曲をかけてみんなの前で踊ったのはとても楽しかったです。日本に来て間もない頃は、多少ストレスが溜まってしまいました。初めての一人暮らしだったし、日本語が下手で地理にも疎かったので…。それで、語学学校の友達とクラブへ踊りに行きました。踊るとストレスがなくなるし、楽しいからクラブにはよく行きます。私がよく行くのは六本木にある『バニラ』と『ハイド』です。バニラは広くて日本人が多いクラブで、ハイドは狭くて外国人が多いクラブです。私はバニラが一番好きです、バニラに行くとずっとトランスのコーナーにいます。

ずっとキレイでいたいから、食事にも気を遣っています。私は将来結婚してからも、ずっとキレイでいたいと思っているんです。日本では離婚が増えていますよね。私はこう思うんです、奥さんがずっと身たしなみに気を遣っていれば、男性が他の女性に心を移す事も少なく、離婚しない確率が高いんじゃないかって。だから、私はずっとキレイでいたいです。

羅さんの言葉は明瞭明白だ。それは彼女の意志と努力が、彼女の口にする言葉にも影響を与えるのだと感じた。彼女のファーストネームの嬌

という字は、「エン」と打っても中々出てこない事が多い。けれど嬌然（エンゼン）という単語を打つと、この漢字を見つける事が出来る。嬌然とは、女性がにっこりと、穏やかに笑う事だ。また、嬌という漢字には「落ち着いて美しい」という意味がある。名は体を表すというのは、まさにこのことだと思った。

シンガポールの魅力

――日系企業を見学して――

外国語学部英語英文学科4年　雨宮英美子

初めて訪れたシンガポールは、外国人に優しい国という印象を受けた。その理由としては、アジアのなかでも、公用語が英語であること、そして治安が良いという点が挙げられる。日系企業を見学して今まで以上に海外で働いてみたいという気持ちが高まった。それでは、まず、出発前の私の参加動機を示し、そして今回お世話になった四つの日系企業の方々と交流し、実感したシンガポールの利点と今後の課題を考え、最後に、私が海外企業研修に参加して経験したことをもとに、来年度への希望や改善点を海外で働くことを希望する人々の観点から順に述べていくことにする。

まず、シンガポール海外企業研修に参加しようと思ったきっかけは、高校生のときにオーストラリアに一年間留学し、文化や言葉が異なる場所でたくさんの人々と出会い、英語を手段として活用できる海外で働いてみたいという興味があったからだ。こうして自らが出向き、海外で活躍する社員の方々から体験談等を聞く研修に魅力を感じ、海外で働くために必要なことはいったい何なのかを長期休暇という絶好の機会を利用し、聞いてみたいという一心で参加した。

今回の研修では、日本貿易振興機構（以下JETROと称す）、紀伊国屋書店、大林組、阪急国際通運へ訪問した。それぞれの場所で感じた海外での日本企業の強みや、今後の課題点を書いていこう。

JETRO

JETROでは、主に日本とシンガポールの架け橋となり、シンガポールで情報収集、提供、及び交換をしている。シンガポールの経済事情などの説明を受けた。その中で、最近のシンガポールは『アジアのハブ（中心）』を目指しているという。

三つの滑走路があるチャンギ空港はその象徴である。2006年には約6000万人の乗客運搬能力を持つようになり、40カ国130都市を結べるようになる。特に、アジアへのゲートウェイをシンガポールにすることによって、隣接する国々（マレーシア、フィリピン、香港、台湾など）に短時間で移動できるという利点を強調している。特に、東京都くらいの土地に横浜市の人口と同じ数の人々が生活している、とても小さい国であるのにも関わらず、FTA（自由貿易協定）やASEAN（東南アジア諸国連合）で中国やインドなどたくさんの国々と協定し、接点を大切にしているという点も見逃してはならない。このように、海外との関わりを深め、情報交換し、互いの国が向上できるように経済発展を遂げていくシンガポールの実状が明白に把握できた。

紀伊国屋書店

紀伊国屋書店を見学させていただき、一番驚いたのは、日本とは違い出版規制があるということだ。日本では言論の自由があるが、シンガポールでは宗教を批判するような言葉を記したり、女性のヌード写真を出版したりすることが禁止されている。これも多民族国家ということが最大の理由だろう。主に、シンガポール人口の75％が中国人であり、次にマレーシア人、インド人と続き、その他に英語を母国語とする人々がいる。このように、さまざまな文化が交わっているので、この出版の規制もお互いを尊重しあう大切なことのように考えられる。

ただ、一つだけ気になった点がある。それは、紀伊国屋書店は高島屋の中にあるということだ。シンガポールでも高島屋は高級ブランドのテナントが集まっている有数の高級百貨店なので、expatriatesと呼ばれる、企業から出向しているアメリカやイギリス、オーストラリア人、あるいは日本人をターゲットとしている。だから、一般庶民は大衆書店と呼ばれる書店に行ってしまう。参加者の一人は、Popular Book Storeという大衆書店に行き、紀伊国屋書店と大衆書店を比較した。現在、シンガポールは子供教育に力を注いでいる影響もあり、大衆書店では教育熱心な家庭向けの問題集が大半を占めていた。このように、国民の需要を把握することも大切である。つまり、紀伊国屋書店は、もっと誰もが気軽に立ち寄れる身近な存在を目指すことが求められる。

大林組

「一年前にこの研修があれば、私の大学卒業後の進路も変わっていただろう。」というのが、大林組の社員の方々に会って感じたことだ。というのも、大林組には自己啓発の一環で、一年から二年の留学を推奨している。海外事業に力を入れている大林組としてはその留学経験を生かして海外へ派遣できる人材を育てている。大学在学中に、将来は海外で働きたいと考えている学生は、就職活動ではしっかりと海外事業に力を注いでいる企業を研究すべきであると感じた。特に、大林組は若い社員のやる気

を大切にしてくれている印象を受けた。というのも、今回話を伺った三人の社員さんすべてが輝いてみえた。また、一人の社員さんからは、シンガポールではもちろん全てが英語で成り立っていると聞いた。つまり、大切な契約のときには助動詞の一つも意味を取り違うと、会話が成立しないということだ。このように、英語を手段として仕事をしてみたい人にはとても魅力的な企業であるといえるだろう。

阪急国際通運

ここでは、特にシンガポールでの生活について議論した。神奈川大学経済学部貿易学科卒業生である浅野さんからはおもしろいシンガポールにある矛盾を教えてもらった。参加学生の間で一番驚いたことを一つ挙げると、シンガポールでは交通機関は地下鉄、バス、そしてタクシーである。特にタクシーは初乗り2・4ドル、日本円にすると、わずか168円である。だからオーチャード通りと呼ばれる中心街ではタクシーがとても多い。一方で、国民が所有する車については、COEと呼ばれる、車を購入する権利を持っていなければ車を買うことができない。これには、国が小さく、大半

が国内生産ではなく台湾からの輸入に頼っているせいもあり、余計な関税が課税されているという理由と、交通渋滞を招かないための対策でもある。参考までに、トヨタのカローラタイプの車も、シンガポールでは日本の10倍の800万円するという。

議論の後半は、浅野さんの部下である日本人の女性にもお話を伺うことができた。彼女は海外で働きたいという夢を持ち、シンガポールに単身で渡り、現地採用でこちらの会社に入社した。語学に関して彼女が大切にしていることは、自分が言うことや他人が話すことを常に意識することだそうだ。シンガポールでは独特な英語の訛り（シングリッシュ）がある。例えば、togetherという英語は「トゲ」と発音され、馴染みのない人々が聞いたらまるで異なる言語となってしまう。なるほど、彼女はこのような違いにも順応し、シングリッシュを習得していったのだ。海外で生活するならば、他人が話している言葉をすぐに使ってみるという積極性が必要なのだ。

以上のように、海外で働いてみたいという好奇心が高まった研修であった。海外で活躍している方々のお話を直接聞くことができ、自分の憧れだったことが現実的に考えられるようになった。

その他に二点加えたいことがある。これはあくまでも、私の個人的な意見になるが、一つに、シンガポールにはポイ捨ての罰金制度があり、町の美化が保たれている。滞在している一週間に、アジアのような雰囲気を感じることはなかった。きれいな町並みが魅力的だった。また、公共の場では、タバコの規制もあり、喫煙者は厳しいことだろうが、タバコを吸わない人にとっては、住みやすく、環境に優しい場所といえるだろう。

もう一つの喜びとしては、世界でもサービスの提供に定評があるシンガポール航空の旅客機でシンガポールに行けたことだ。研修前にシンガポール航空の見学を希望したが、残念ながらその希望は通らなかった。しかし、念願の旅客機に乗れたことが嬉しかった。また、今回、旅客機に乗るのが初めての学生もいたので、日本を離れてみるという経験も大いに勉強になるのではないかと思った。

次回の研修については、やはり実際に働いてみることをお薦めしたい。今回、見学という形で企業を訪問させていただいたが、インターンシップのような体験をしたほうが、より一層の自分の糧になるのではないかと感じた。お話を聞けただけでもとても価値のあることだったが、せっかくの機会に、自分の体で試みるということも挑戦してみたかった。また、現地での移動時間がかかっていたように感じた。今回、引率の教授を含めて12人の団体行動をとったが、企業訪問の朝はみんなで一緒に移動し、それ以降はタクシーを拾い、4人ずつに分かれてホテルに帰った。企業訪問の際には少ない人数だからといって別々に行動するのではなく、必ず現地のバス会社に依頼するなどして、全員が一緒に行動できるようにしたほうが、行動が迅速になると思う。全体的には誰もが楽しく、有意義な時間を共有でき、満足の研修であった。だから、是非、来年はさらに多くの学生が意欲的にこのような研修に参加してくれることを望んでいる。